

英語と日本語における気象に関するメタファー

Meteorological Metaphors in English and Japanese

松 井 真 人

Mahito Matsui

要旨

本稿は、英語と日本語における天気、晴れ、曇り（雲）、雨といった基本的な気象に関するメタファー表現を分析し、そのようなメタファー表現に見られる日英語間の共通性と差異、および気象の概念メタファーの経験的基盤について検討した。その結果、日英語の気象に関するメタファー表現の意味及び概念メタファーには多くの共通性が見られた。もちろんそれぞれの言語特有のメタファー的意味や概念メタファーも見られるが、そのような場合であれ、日英語間で共通性が見られる場合であれ、英語話者と日本語話者の気象に関する経験、そのような経験から生ずる気象に関する概念、および人間に共通する認知能力の観点から、日英語の気象に関する概念メタファーの経験的基盤が説明できることを示した。

キーワード：概念メタファー、メタファー表現、気象、英語、日本語

1. 序論

私たちは「気が晴れた」「雲隠れる」「賞賛の雨」などというように、感情、状況、行為などを気象に喩えて語ることがよくある。このようなメタファー表現が使われるのは、私たちが日常的な経験を気象に見立てて理解しているからである。これまで英語あるいは日本語における気象のメタファーを論じた先行研究はあるが、日英語の詳細な比較研究はなされていない。そこで本稿は、英語と日本語における気象に関するメタファー表現の意味を分析し、天気、晴れ、曇り（雲）、雨といった気象現象に関する概念メタファーが、感情、性格、状況、行為といった概念領域をどのように概念化しているかということを明らかにし、英語と日本語における、気象に基づく物事の理解の仕方の共通点と差異を明らかにすることを試みる。さらに、それぞれの言語における気象の概念メタファーの経験的基盤についても論ずる。

2. 認知言語学におけるメタファー論

本稿でメタファーを分析する際に拠り所とする理論的枠組みは、Lakoff and Johnson (1980, 1999)、Lakoff (1987, 1993)などで発展した、認知言語学におけるメタファー論である。メタファーの研究は古代ギリシャの時代から続いているが、長い間、メタファーを含むレトリックは、口頭弁論あるいは芸術的表現の技術と考えられてきた(佐藤1992)。つまり類似性に基づく比喩としてのメタファーは、効果的な言語表現の技術と見なされてきたのである。しかし、上記のGeorge LakoffとMark Johnsonによる著作では、伝統的なメタファーについての考

え方と大きく異なる、人間の認知を考慮したメタファー論が展開されている。この理論では、メタファーは言語表現だけに関わるのではなく、人間の概念体系の多くの部分がメタファーによって構造化されていると見なされている。(1)の例を見てみよう。

(1) ARGUMENT IS WAR

- a. Your claims are *indefensible*.
- b. He *attacked* every weak point in my argument.
- c. His criticisms were *right on target*.
- d. I *demolished* his argument.
- e. I've never *won* an argument with him.

Lakoff and Johnson (1980)

小型英大文字で書かれているARGUMENT IS WARの部分は、英語文化では、議論の概念が戦争の概念に基づいて理解されていることを示している。このような、ある概念を他の概念に基づいて類比的に理解するという認知のあり方を概念メタファー(conceptual metaphor)という(Lakoff 1993)¹。理解の対象となる概念を目標領域(target domain)、目標領域を理解するため用いられる概念を起点領域(source domain)という。上記の例ではARGUMENTが目標領域、WARが起点領域である。そして、その下に挙げられている(1a-e)の英文は、ARGUMENT IS WARという概念メタファーが存在することによって生ずる言語表現である。これらの言語表現では、斜体の部分が示すように、本来は戦争の特定の側面を語るための表現を用いて、議論の特定の側面が語られている。このような言語表現の存在が、議論の概念が戦争の概念に基づいて理解されていることの証拠となる。このような、概念メタファーから派生する言語表現は、メタファー表現(metaphorical expression)と呼ばれる(Lakoff 1993)。

ある概念が他の概念に基づいて理解されるということを、LakoffとJohnsonは写像(mapping)という用語を用いて説明している(Lakoff 1993, Lakoff and Johnson 1999)。写像とは起点領域に含まれる諸要素を、目標領域に含まれる諸要素に対応づけることである。例えば私たちは、戦争というものは、戦闘準備、攻撃の開始、防戦、退却、反撃、勝利などの要素から構成されていることを知っている(高尾2003)。つまり、私たちが持っている戦争の概念はこれらの要素から成り立っていると言える。そしてARGUMENT IS WARという概念メタファーは、戦争についてのこれらの知識を、議論の概念を構成する要素に対応づけること、すなわち写像することによって、理解することである。(2)はそのような写像の一部と、そのような写像から派生するメタファー表現を示したものである(Lakoff and Johnson 1980, 高尾2003)。

(2) a. 戰闘の準備→議論の準備

She came to the meeting *armed* with all the facts and figures.

b. 戰略→論法

If you use that strategy, he will *wipe* you out.

c. 防戦→弁護

The President appeared on TV to *defend* his tax proposals.

d. 退却→議論するのをやめる

We *retreated* to remarshall forces.

¹ 本稿では認知言語学の慣例に従って、英語の概念メタファーは小型英大文字で示す。また、日本語の概念メタファーは《 》で示す。

e. 反撃→反論

I decided on a *swift counterattack*.

以上のように、議論の概念が戦争の概念に基づいて理解されている理由は、議論と戦争という事態の間に類似性(similarity)が認識されるからである²。このような概念メタファーの存立理由（動機づけ）は、経験的基盤(experiential basis)と呼ばれる³。

概念メタファーは、私たちの外界に対する認識のあり方の一種なので、それに影響を受けるのは上で見たような言語表現だけではない。私たちの行動も影響を受ける。私たちは議論には勝ち負けがあると考え、議論の相手を敵と見なし、相手の議論の立脚点を攻撃し、自分のそれを守る。また、優勢になったり、劣勢になったりもし、戦略をたてて、実行に移したりもする(Lakoff and Johnson 1980)。これはARGUMENT IS WARという概念メタファーに基づいて私たちが考え方行動するからである。

3. 気象のメタファーに関する先行研究

日英語の気象のメタファーの実例を分析していく前に、この章では、気象のメタファーに関する先行研究を見ておく。まず、英語に関するものとしてはDeignan (1995)がある。この文献には、様々な意味領域の語彙のメタファー的意味が記述されているが、Weatherの項目では、sunny, fog, cloudなど気象に関わる語彙のメタファー的な意味が包括的かつ詳細に記述されている。しかし、この文献では、個々のメタファー表現を可能にしている概念メタファーについての言及はなく、英語以外の言語への言及もない。

次にLakoff et al. (1991)は、様々な概念領域に関わる概念メタファーのリストである。このリストにはEXTERNAL CONDITIONS ARE CLIMATEという概念メタファーとこの概念メタファーから派生する(3)のメタファー表現が挙げられている。

(3) a. The climate is right for a takeover.

b. The economic forecast is favorable.

Lakoff et al. (1991)

さらに、EXTERNAL CONDITIONS ARE CLIMATEの下位メタファーとして、Adversity is Adversity due to Bad Weatherが挙げられており、その概念メタファーから派生するメタファー表現として(4)が挙げられている。

(4) a. It rained on my parade.

b. Into each life some rain must fall.

c. Save it for a rainy day.

d. An ill-wind blows no good.

e. There were dark clouds on the horizon.

f. We can weather this storm.

g. Stormy weather (song)

Lakoff et al. (1991)

² この類似性は客観的な類似性ではなく、経験に基づく類似性(experiential similarity)である(Lakoff and Johnson 1980)。

³ Lakoff and Johnson (1980)は、概念メタファーの経験的基盤として、経験的類似性の他に経験的共起性(experiential cooccurrence)を挙げている。

以上のように、Lakoff et al. (1991)で扱われている気象の概念メタファーは、2種類だけであり、このメタファーについての網羅的な分析にはなっていない。また、英語以外の言語への言及もない。

また、Grady (1997)ではCIRCUMSTANCES ARE WEATHERという概念メタファーが挙げられており、気象条件と私たちの感情の状態または私たちの状況との相関関係が、その概念メタファーの経験的基盤であると説明されている。Gradyが挙げているこの概念メタファーに基づくメタファー表現は、(5)の3例である。

(5) a. So foul a sky clears not without a storm./ Pour down thy weather. (*King John*, IV, ii, 108-9)

b. The *storm* has passed.

c. She's a *fair-weather* friend.

Grady (1997)

以上のように、Grady(1997)は気象の概念メタファーの経験的基盤を挙げているが、英語における気象に関する最も一般的な概念メタファーが挙げられているだけで、個々の気象現象に関する概念メタファーやメタファー表現の詳細な分析はなされていない。また、英語以外の言語への言及もない。

次に日本語の気象のメタファーの先行研究を見てみよう。Shinohara and Matsunaka (2009)は(6)のメタファー表現を挙げている。

(6) a. *kokoro-ni honokana hikari-ga sasu.*

b. *kumo-yuki-ga ayashii.*

c. *kuro-kumo-ga mune-ni ooi-kabusaru.*

d. *kimochi-ga harebaresuru.*

e. *kokoro-wa doshaburi da.*

f. *ikari-no tsunami-ga oshi-yosseru.*

g. *kokoro-ni arashi-ga hukiareru.*

h. *kaminari-ga ochiru.*

Shinohara and Matsunaka (2009)

Shinohara and Matsunaka (2003, 2009)は、以上のようなメタファー表現が存在することから、EMOTION IS EXTERNAL METEOROLOGICAL / NATURAL PHENOMENON THAT SURROUNDS THE SELFという概念メタファーが存在していると主張している。また、Shinohara and Matsunaka (2009)では、この概念メタファーの経験的基盤についても議論されており、天候の変化が人の精神的・生理的状況に影響を与えるという動機づけを挙げている。またShinoharaらは、和歌の実例を挙げ、日本、特に和歌の世界では、心を小宇宙と捉える伝統があり、内的な感情が自然現象あるいは気象とみなされていると述べ、このような社会・文化的背景が、上記の概念メタファーの動機づけとなっている可能性があることを指摘している。しかしながら、Shinoharaらも、最も一般的な気象現象に関する概念メタファーを挙げているだけで、個々の気象現象に関わる概念メタファーやメタファー表現の詳細な分析は行っていない。また英語以外の言語に関する言及もない。

次に、糲山(2006)は、本来は「天気」に関する多くの日本語の表現が、「人間の心の状態(の変化)」について述べるのに用いられていることを指摘している。そして、例えば「お天気屋」という表現が、「心の状態(=気分・機嫌)が変わりやすい人」を表すように、特定の天気を表す表現が特定の意味を表すのは、日本人が天気について(7)のような知識を持つ

ており、その知識がメタファー表現でも維持されるからだと述べている。

- (7) a.(日本の) 天気は変わりやすい (=比較的短いサイクルで変化する)。
b.「晴れ」は(日本に住む)人間にとって好ましい天気である (=雨や曇りの状態から「晴れる」ことは好ましい変化である)。
c.「雨」は(日本に住む)人間にとって好ましくない天気である。
d.「曇り」は、「雨」より好ましくない天気とは言えないが「晴れ」と比べて、(日本に住む)人間にとって好ましくない天気である (=晴れた状態から「曇る」ことは好ましくない変化である/変化が進んで、「雨」というさらに悪い状態に進む兆候である)。

糸山(2006: 70-71)

以上の知識は、Lakoffらの用語を用いれば、起点領域(気象に関する様々な概念)から目標領域(人間の心に関する概念)へ写像される要素であると言える。

糸山は多くの天気に関するメタファー表現の意味を分析し、日本語話者に(8)のような物事の捉え方があると主張している。

- (8) a.《心の状態(=気分・機嫌)が変わりやすい人を、天気を通して見る》
b.《よい心の状態(になること)を、晴れ(ること)を通して見る》
c.《よくない心の状態(になること)を、曇り(になること)を通して見る》
d.《よくない心の状態(特に「不機嫌」)を、(雨が降る区域である)低気圧を通して見る》

糸山(2006: 88)

(8)は「気象」を起点領域、「心(の変化)」を目標領域とする、日本語における概念メタファーと言える。糸山(2006)は、単なる言語表現の分析だけでなく概念メタファーやその経験的基盤の分析も行っているが、同書の分析対象となる目標領域が人間の心に関する概念領域のみであるために、気象という概念領域が人間の心以外のどのような概念領域へ写像されるかについての考察は含まれていない。また、分析の対象となる言語も日本語のみである。

最後に松浦(2013)は、「晴れる」という表現の、精神現象に関するメタファー的意味を分析している。松浦によれば、私たちは天気に関する経験から、(9)のような背景知識を持っているという。

- (9) 光が多ければ好ましい状態であり、遮蔽物である大気中の雲・霧によって光が遮られれば好ましくない状態になる。また、霧が出ると視界が遮られ、視界が悪くなることがあることを、雲が出ると雨が降り、さらに好ましくない状態になる可能性があることを、我々は背景知識として持っている。

松浦(2013: 118)

このような背景知識に基づき、雨は黒い雨雲が光を遮り、黒く好ましくない状態、晴れは雲がなく光が差し、白く好ましい状態、そして、曇りはその中間に位置し、灰色でどちらでもない状態に概念化されるという。このような考察に基づき、松浦は精神・思考に関する(10)の概念メタファーを提案している。

- (10) a.《知覚者の精神空間において感情の遮蔽物が消えることは「晴れる」》 松浦(2013: 120)
b.《知覚者の精神空間において思考の遮蔽物が消えることは晴れる》 松浦(2013: 123)

そしてこのような概念メタファーに基づいて、不安や心配といった感情の遮蔽物や、疑いや嫌いといった思考の遮蔽物が雲・霧と捉えられ、そのような遮蔽物が消える状況が「晴れる」で表現されると分析している。

松浦は私たちの天気についての経験や背景知識の観点から、天気の概念化に関する経験的基盤を説明しており、「喜びが晴れる」「愛しさが晴れる」「怒りが晴れる」「恐怖が晴れる」といった表現の容認度が低い理由についても、私たちの雲・霧に関する「好ましくない」「はつきりとしない」といった経験とそれぞれの文が表現している「喜び」「愛しさ」「怒り」「恐怖」といった感情との不適合性の観点から説明がなされている。また、松浦(2013)は、天気のメタファーについてかなり踏み込んだ分析になっているが、多様な気象の中で主として「晴れる」のみに関する分析となっており、他の言語との比較も行われていない。さらに、松浦(2014)では「晴れる」と「曇る」に関するメタファー表現に対する制約が論じられており、松浦(2017)では「晴れる」「曇る」「風」「嵐」「台風」に関わる概念メタファー及びその概念メタファーから生ずるメタファー表現に対する制約が詳細に論じられているが、いずれの論文でも日本語以外の言語との比較は行われていない。

4. 気象のメタファーの日英語比較

4. 1 天気に関するメタファー

本章では、日英語の気象に関するメタファー表現の意味を分析する。そして、両言語における気象に関する概念メタファーとそれらのメタファーの経験的基盤を明らかにし、その共通性と差異について検討する。本稿では、特に、天気、晴れ、曇り（雲）、雨に関するメタファーを分析する。以下で挙げられているメタファー表現の意味については、他の引用の表記が無い限り、英語に関してはDeignan (1995)、日本語に関しては中村(2014)に基づいている。

まず天気そのものに関するメタファー表現について見ていく。『小学館ランダムハウス英和大辞典』によると、英語のweatherには「（人の運命・時代などの）移り変わり、変遷、浮沈、栄枯盛衰、有為転変、（心の）気分、雰囲気」というメタファー的意味がある。(11)はその実例である。

(11) a. The weather of his father is variable.

b. The weather of the 1980s has been increasingly conservative.

『小学館ランダムハウス英和大辞典』

またweatherには動詞的用法として「<嵐・危険・困難などを>切り抜ける」（『小学館ランダムハウス英和大辞典』）という意味がある。(12)はその実例である。

(12) a. The company weathered the storm of objections to the scheme.

b. Northern Ireland weathered the recession better than any other region in the UK. (LDOCE)

一方、日本語には(13)のような表現がある。

(13) a. 上司のお天気次第で状況がくるくる変わる

b. お天気屋のことだからあてにできない

c. 不穏な空合い

d. おかしな空模様になってきた

中村(2014)

(13a, b)の「天気」は「機嫌」、(13c)の「空合い」や(13d)の「空模様」は「事のなりゆき」を表している。以上のメタファー表現の意味から分かることは、日英両言語において、人の心や社会的な場が、気象が起こる空に捉えられているということである。つまり(14)の概念メタファーが存在すると言える。

- (14) a. THE MIND/THE SOCIAL FIELD IS THE SKY
b. 《心あるいは社会的な場は空》

さらに、気分、機嫌、事のなりゆきといった心理的現象あるいは社会的状況は、天気に喩えられている。つまり、気象の分野で一般性の高い天気(WEATHER)という概念領域に関しては、日英語に共通して(15)の概念メタファーが存在していると考えられる。

- (15) a. THE MENTAL /SOCIAL STATE IS WEATHER
b. 《心理的・社会的状態は天気》

この概念メタファーは、天気の概念領域から心あるいは社会的な場に関する概念領域へと「変化する」「一定時間は同じ状態が続く」という知識を写像する。この概念メタファーの経験的基盤は、天気の上記の特徴と、心や社会的な場の「移ろいやすい」「一定時間は同じ状態が続く」という特徴の間に、類似性が認識されるということであると考えられる。

4. 2 晴れに関するメタファー

次に、晴れに関するメタファーについて検討する。前節で述べたように、私たちは「天気は変化する」という知識を持っているが、その他にも(16)のような知識を持っており、自分以外の多くの人も同じような知識を持っていることを知っている。

- (16) a. 晴れの天気は、雲や霧や霞が存在しないか、それらが少ないために周囲が明るく、気温が上がることが多く、人の活動が容易になり、好ましい状態である。
b. 雨の天気は、周囲が薄暗くなり、(歩きにくい、戸外での活動が制限されるなど)人の活動が困難になり、好ましくない状態である。
c. 曇りの天気は、日光や空が遮られ、雨の前兆となり、晴れほど好ましい状態ではない。

また私たちは、それぞれの天気の原因となる物体（雲、雨）についても、雨は好ましくないもの、雲は好ましいとは言えないものという知識を持っていると考えられる。もちろんこれらは一般的な知識であって、雨は農作物を育てたり水源を満たしたりする好ましいものであるという知識も持っているし、炎天下にいる際に現れる雲は、直射日光を遮ってくれる好ましいものであるという知識も持っている。また少なくともイギリスや北米など、英語が母語として用いられている多くの地域においても、日常的に雲や雨が人間に与える影響は日本とほとんど同じであると考えられるので、上記の天気に関する知識は多くの英語話者も持っていると想定できる。

晴れ、曇り（雲）、雨に関する概念メタファーでは、以上のような知識が、類似性の認識に基づいて、精神や状況に関する概念領域に写像され、メタファー的意味を持つ言語表現が生ずる。まず英語における晴れに関するメタファー表現を見ていく。Deignan (1995)によると、(17)の用例に見られるように、sunnyは、人の性格を表す場合には「陽気で友好的であり、

周囲の人たちを楽しい気分にさせる」という意味になり、人の気分を表す場合には「樂觀的で楽しい気分である」ということを意味する。さらに、見込みや将来を表す場合には「肯定的で樂觀的な気持ち」という意味になる。

- (17) a. Everyone says what a happy, sunny girl she was.
b. By the time he reached the outskirts of Cambridge, David was in a sunny mood.
c. Producers are well aware that in terms of sales, the outlook is far from sunny.

Deignan (1995)

以上のように、英語のsunnyは、「悩みや心配事がなく、樂觀的で楽しい精神状態」を表している⁴。このような晴れに関わる語彙の意味拡張は(18)のように日本語にも見られる。

- (18) a. 気が晴れる
b. 晴れ晴れとした気持ち
c. 照る日もあれば曇る日もある。
d. 疑いが晴れる。

中村(2014)

(広辞苑第六版)

(18a, b)では、悩みや心配事といったネガティブな感情が雲（あるいは霧・霞）と捉えられ、それが消えてすっきりとする状況を晴れると表現している。(18c)では、晴れの日が「順調な時」を表し、曇りの日が「逆境の時」を表している。一方、日本語では、悩みや心配事といった感情だけでなく、(18d)の場合のように、疑いや嫌疑が雲（や霧・霞）と捉えられ、それがなくなる状況も「晴れる」と表現することがある。

以上のように日英語の晴れに関するメタファー表現は「悩みや心配事がない」「樂觀的」といったポジティブな状況を表すが、これは、このような状況に関する知識と(16a)のような晴天に関する知識の類似性に基づいて、晴天の概念から当該の状況に関する概念に写像が行われた結果であると考えられる。まとめると、晴れに関しては、日英語に(19)のような概念メタファーが存在する。

- (19) a. HAPPY IS SUNNY
b. 《不安がない状況は晴れである》

また日本語には(18d)のような言い方があることから、《嫌疑は雲》という概念メタファーが存在すると考えられるが、これについては次節でも触れる。

⁴ 英語のclearは、形容詞的用法で「晴天の、晴れた」、自動詞用法で「晴れる」という気象に関わる意味を持つと同時に、他動使用法では「疑惑を晴らす」という意味がある(*LDOCE*)。OEDによると、形容詞的用法のclearは、ラテン語から古フランス語を経て中英語にclerとして入った。中英語の時代には、古フランス語から受け継いだ、「日光があふれている」「霧、もや、霞がない」といった気象に関する意味を持っていたが、その他にも語源的な意味である「輝く」「完全に明るい、光を通す」などの気象以外に関する多くの意味がすでにあった。また、頻度順の語義配列を採用している*LDOCE*によれば、clearの気象に関する意味は形容詞的用法で6番目、動詞的用法でも6番目に記載されている。以上のことから、語源や現代における使用頻度の観点から見ると、clearは本来的に気象を表す語ではないと考えられるので、本稿での分析からは除外することにする。

4. 3 曇りあるいは雲に関するメタファー

本節では曇りの天気と雲についてのメタファー表現及び概念メタファーを見ていく。まず英語の実例を見ていく。Deignan (1995)によるとcloudは、「状況を損なってしまう不快な出来事や、状況を隠してしまったり、状況を理解するのを困難にしてしまったりするような物事」を表す。まず、状況に対して悪い影響を与えるものとしてのcloudの場合、(20)のようにa cloud of somethingという形を取ることがある。

- (20) a. He couldn't risk his political future by marrying into the family while a cloud of suspicion hung over it.

- b. They had been suffering for weeks or even months under the cloud of depression.

Deignan (1995)

また(21)のように、under a cloudという表現は、ある人あるいはものが、「なにか間違ったことをしたのではないかという理由で疑いをかけられている」ことを表す。

- (21) a. I'll probably live the rest of my life under this cloud.

- b. His economic reform programme has come under a cloud because of a stockmarket scandal.

Deignan (1995)

(22)のように、cast a cloud overという表現は、「望みが薄くなり、楽観的になることができないような状況」を表す。

- (22) a. That immediately casts a cloud over the future of the other player.

- b. The failure to raise prices also cast a cloud over the market.

Deignan (1995)

(23)のa cloud hanging over someoneという表現は、「自分のせいかもしれない不快なことが起こり、そこからどのような影響が生ずるかがわからないことから、未来に希望を持つことができず、楽しくない状況」を表す。

- (23) We do not want the tour to end with this cloud hanging over us; we have nothing to hide.

Deignan (1995)

(24)のa cloud appearsあるいはa cloud appeared on the horizonは、「状況を不愉快にしたり、ある状況がすぐに終わってしまうように思わせたりする何かが起こったり、現れたりすること」を意味する。

- (24) A cloud appeared over his friendship with the king.

Deignan (1995)

また、(25)のように、cloudの動詞的用法は「雲で覆う」という意味があり、文字通りに曇りの天気を表している(LDOCE)。

- (25) Thick mist clouded the mountain tops.

(LDOCE)

さらに、(26)のように「(グラスや液体が) 透明度が下がって見通すのが困難になる」という意味がある(*LDOCE*)。

- (26) windows clouded up with steam (LDOCE)

この他に(27)のように「通常ならばよい状況を台無しにする」という意味がある。

- (27) Recent meetings have been clouded by serious public disagreements. Deignan (1995)

さらに(28)のように動詞的用法のcloudあるいはcloud overには「表情が楽しそうではなくなる」という意味がある。

- (28) a. Trish's face clouded with disappointment.
b. Grace's face suddenly clouded over and she turned away. Deignan (1995)

また、(29)のように、動詞的用法には「いつもより判断力を低下させる」「問題を理解するのを困難にさせる」といった意味もある。

- (29) a. Wasn't he allowing his personal interests and prejudices to cloud his judgement?
b. When a problem arises in a family emotions always cloud the issue. Deignan (1995)

形容詞のcloudyについては、『ランダムハウス英和大辞典』に「〈鏡などが〉曇った；〈液体などが〉(…で) 透明でない、濁った((with...))」「〈意味・言葉・概念などが〉あいまいな、不明瞭な；〈目などが〉(…で) もうろうとした((with...))」「〈顔・表情・心などが〉(不幸・心配などで) 隠気な、憂鬱な、浮かない」「嫌疑〔恥辱など〕を受けた、評判のよくない、いかがわしい」という意味が挙げられている。

以上のように、英語においては、「視界を遮るもの、不快感・不安感を生じさせるもの」を雲として理解する概念メタファーが存在することがわかる。また、「透明でない状態、曇りな状況、良くない状況、不安な状況、明晰な思考ができない状況」が曇りの天気によって概念化されている。

次に、日本語の雲あるいは曇りのメタファー表現を見ていく。『広辞苑第六版』や中村(2014)には雲に関する表現が多数挙がっているが、日常的によく使われる表現としては(30)のようなものがある。

- (30) a. 窓ガラスが曇る
b. 涙で目が曇る
c. 不安に顔が曇る
d. 理性が曇る (広辞苑第六版)
- e. 照る日もあれば曇る日もある
f. 借金をかかえて雲隠れする
g. 会議の雲行きがあやしい
h. 浮雲の身の上

- i. 前途に黒雲が拡がる
- j. 暗雲が漂う
- k. 党の分裂をはらんで風雲急を告げる事態に発展する
- l. 時代の風雲児

中村(2014)

(30a, b)は、「光や色などがぼんやりする」ことを「曇る」で表している。(30c)は「心や顔つきが暗くなる」ことを、(30d)では「考えなどがはっきりしない」ことを「曇る」で表している。(18c)でもすでに見たように、(30e)では曇りの日が「逆境の時」を表している。また(30f)では雲が「遮蔽物」を表している。その他の文では、雲が「形勢」を表しているが、(30g)の「雲行き」は、「怪しい雲行き」のように、悪い方向への形勢の変化を表すために用いられることがほとんどであるし、(30i, j)のような黒い雲は雨を予感させるため、「障害となるもの」「不安な形勢」を表すことになる。また(30h)では雲が移動する性質を持っていることから、「物事が落ち着かないで不安定なさま」を表す。 (30k, l)の雲は、「風」という語と一緒に使われ、「大きな事件の起きそうな情勢」を表している。以上のように日本語では、雲は視線を遮る遮蔽物、あるいは形勢を概念化するメタファーとして用いられる。特に、黒雲、暗雲といった雨を強く意識させる雲の場合は、不安定な情勢を概念化するのに用いられ、風とともに用いられると大きな事態を予想させる不安な状況を表現する。雲によって概念化されるこれらの物事が無くなることが、「気が晴れる」「晴れ晴れする」ということであり、悩みや不安が解消する状況を表すことになる。また、何かで視界が遮られてよく見通せない状況や、不安で楽しくない状態、明晰な思考ができない状況を曇るという天気で概念化している。さらに曇りや雲といった言葉は使われていないが、「疑いが晴れる」という表現では、嫌疑や疑いが雲（あるいは霧・霞）と捉えられ、それがなくなる状況を「晴れる」と表現している。

以上のように、英語と日本語では、雲は「日光や視界の遮蔽物、不快・不安な状況や形勢」を概念化しているが、特に遮蔽物に関しては、物理的な遮蔽物というだけでなく、「判断や理解を困難にしてしまう障害物」を意味する。日本語では「雲行き」という表現の場合のように雲が（多くの場合、悪い方向への変化を予感させる）「形勢」を表すこともある。また「疑い・嫌疑」を雲と捉えることもある。そして「気が晴れる」「晴れ晴れする」と言った表現から分かるように、雲という言葉自体は現れないものの、「不快感・不安感」を雲（あるいは霧・霞）として捉えている事例もある。さらに日英語双方において、「何かで視界が遮られてよく見通せない状況や、不安で楽しくない状態、明晰な思考ができない状況」を曇りという天気の状態で概念化している。

以上のことから、英語と日本語の双方に、(31)-(37)のような概念メタファーが存在すると考えられる。

- (31) a. UNCLEAR IS CLOUDY
 - b. 《視界が遮られている状況は曇り》
- (32) a. A COVER IS A CLOUD
 - b. 《遮蔽物は雲》
- (33) a. UNEASY IS CLOUDY
 - b. 《不安な形勢は曇り》
- (34) a. DEPRESSING IS CLOUDY
 - b. 《憂鬱な気持ちは曇り》

- (35) a. UNEASINESS IS A CLOUD
b. 『不安は雲』
- (36) a. DIFFICULT TO UNDERSTAND IS CLOUDY
b. 『理解が困難な状況は曇り』
- (37) a. AN OBSTACLE TO UNDERSTANDING IS A CLOUD
b. 『理解を妨げるものは雲』

この他に、日本語には《状況は雲》《嫌疑は雲》という概念メタファーがあると考えられる。このような概念化は、(16)で見たように、英語話者と日本語話者が持っている曇りの天気に関する概念の中に、「人間にとてプラスの価値を持つ日光が遮られ、人間にとてマイナスの価値を持つ雨の予兆となり、太陽、星、空を隠して視界が遮られる」という知識が含まれており、それらの知識が状況、感情、思考に関する特定の概念領域（状況の悪化、不安感、不快感、理解の低下、判断の低下、嫌疑）に、概念間の類似性という経験的基盤に基づいて写像された結果であると考えられる。

4. 4 雨に関するメタファー

次に雨に関するメタファーを見ていく。Deignan (1995)には、雨に関わる語としてwetとshowerが挙げられている。まずwetは(38)に見られるように「弱気で他人と議論をしたがらない、または十分な熱意や気力がない」人を表すのに用いられる。これはインフォーマルなイギリス英語である。

- (38) Don't be so wet, Charles. Deignan (1995)

またwetは「穏健な政策を支持する保守的政治家」を表す場合がある⁵。この意味は(38)の「弱気な人」から意味の特殊化（シネクドキ）を経て派生したものと考えられる。この意味のwetには、(39a)のような形容詞的用法と(39b)のような名詞的用法がある。

- (39) a. To advocate dialogue and co-operation in politics is not to be wet and unpolitical.
b. Other wets are not satisfied: Lord Prior gave a warning that there could be serious social problems. Deignan (1995)

showerは、(40a)のように通常は良いものについて用いられ、「多くの場合予期せず現れる多数あるいは大量のもの」を表す。また動詞的用法の場合は、(40b)のように「多くの場合やりすぎと思えるほどに、相手に多くの贈り物や賞賛を送る」ことを意味する。

- (40) a. For those who are successful there are showers of praise.
b. He showered me with presents which were delivered to the office. Deignan (1995)

OALDによると、rainは(41a)のようにrain of somethingの形で、「空から同時に落下してくる多

⁵ 『小学館ランダムハウス英和大辞典』によれば、この意味のwetは「特に1980年代、Thatcher 首相の強硬路線に反対した政治家を指す」とのことである。

数のものを表す」ことがある。また(41b)のように動詞的用法では「何かが大量に落ちたり、何かを大量に落としたりする」様子を表す。

- (41) a. a rain of arrows/stones
 b. Bombs rained (down) on the city's streets. (OALD)

次に日本語の雨に関わるメタファー表現を見てみよう。

- (42) a. 血の雨。涙の雨。弾丸の雨。
 b. 雨降って地固まる
 c. 一雨ありそう
 d. 弹丸が雨霰と飛んでくる
 e. 雨風をしのぐ
 f. 雨露の恵み
 g. 時雨れる
 h. 蟬時雨

中村(2014)

(42a)や(42d)では「続けざまに激しく降り注ぐもの」が雨によって概念化されている。「恶心は降る雨」「弾丸雨下」と言った表現も同類である。(42b)の雨や(42c)の一雨は「もめごとや騒動」を表す。(42e)の雨風は「社会のきびしさ」を表す。(42f)の雨露は「大きな恩恵」を表す。(42g)では通り雨が「涙をこぼすこと」を表し、(42h)は通り雨が降る時の音が「多数の蝉が鳴く声」の喻えとなっている。

以上の表現の意味を見て分かるように、英語でも日本語でも、雨は、「物体が連続的に落ちる様子」を表す場合が多い。その場合には、爆弾や矢や血など好ましくないものの落下を表すことが多い。英語のshowerは落下の意味を伴わずに、「大量や多数」という意味を表すことがある。その場合は、publicityやpraise、presentなど人にとって良いものが表現の対象となる。しかし日本語では「賞賛の嵐」「批判の嵐」という言い方はあるが、「賞賛の雨」「批判の雨」という言い方はふつうしない。また日本語では、雨自体がもめごとや騒動、社会の厳しさなど、人にとってネガティブな状況を表すこともある。しかし、一方で「雨露の恵」のように、雨を良いものの喻えとして用いることもある。これは「恵みの雨」や「慈雨」という表現の存在からわかるように、日本語話者が持つ雨の概念の中に、(16b)の知識に加えて「時に雨は人にとって良いことをもたらすことがある」という知識が含まれていることによるものと考えられる。また英語には「弱気な」「稳健な保守的政治家」という意味があり、日本語では「蝉時雨」という蝉の声を表現するメタファー表現があるが、これらはそれぞれの言語特有のメタファー的意味である。以上のことから、日英語には(43)のような雨に関する共通の概念メタファーがあると考えられる。

- (43) a. A LARGE NUMBER OF OBJECTS FALLING SUCCESSIVELY IS RAIN
 b. 《連続的に落下する多数の物体は雨》

また、英語特有の雨に関する概念メタファーには(44)がある。

- (44) a. A LARGE NUMBER IS RAIN
b. A LARGE AMOUNT IS RAIN

(43)(44)の概念メタファーは、多数の水滴が連續的に空から降ってくるという雨の特徴と、何かが多数・大量に落下してくる、あるいはものが多数・多量に存在している状況との間の類似性に基づいて成立したと考えられる。また、日本語特有の概念メタファーには(45)がある。

- (45) a. 《悪い状況は雨》
b. 《良い状況は雨》

(45a)は、「人に対する好ましくない」という雨の特徴と、人が不安や不快を感じる悪い状況との類似性が経験的基盤になっており、(45b)は「人にとって利益になることがある」という雨の特徴と、人にとって恩恵となる良い物事との類似性に基づいていると言える。

4. 4 結論

本稿では、英語と日本語における天気、晴れ、曇り（雲）、雨という基本的な気象現象に関するメタファーを分析し、その共通性と差異、概念メタファーの経験的基盤について検討した。日英語双方において、「心理的、社会的、物理的状態」が天気で概念化されており、「悩みや心配事がない状況」は晴れで概念化されている。また「遮蔽物、見通しが悪い状況、不安、憂鬱、理解しにくい状況」が曇り（雲）で概念化される。さらに「好ましくない物体が連續的に落下する状況」は雨で概念化される。これらの概念メタファーは、(16)で見たような、私たちが持っている気象に関する基本的な知識が気象以外の概念領域に写像されていることを示している。日英語間で違いがあるメタファー的意味についても、例えばwetが「弱気な」「穏健な保守的政策を支持する政治家」を意味するのは、それらの性格や人から受けれるネガティブな印象と、雨から受けれる陰気な印象との類似性によるものと考えられる。また、showerが「大量・多数」を意味したり、雨が「大きな恩恵」を意味したりする場合も、私たちの雨に関する知識（「多数の水滴が落ちてくる」「人にとって利益になることがある」）と目標領域についての知識の類似性の観点から、その概念化の経験的基盤を説明できる。

以上のように、気象のメタファーには日英語間で多くの共通性が見られるが、その理由の一つは、イギリスや北米のような英語を母語とする地域と日本では、気象条件に際立って大きな違いがないため、英語話者と日本語話者の気象に関する概念（知識と意味づけ）に大きな差がないということであろう。また、もう一つの理由は、民族や人種にかかわらず人間の認知能力が同等であることから、特定の気象と類似性を感じる物事が、英語話者も日本語話者も基本的に同じであるということであろう。このように言葉の意味には、日常の身体的経験と認知能力が深く関与しているのである。

今後の研究の展望としては、霧、霞、嵐、台風、風、雷、雪など、本稿で扱わなかった気象のメタファーを日英語間で比較分析し、気象という現象に基づいて人間がどのように物事を理解しようとしているのか、また、その理解の仕方は異文化間でどのような共通性と差異があるのかということを、さらに深く検討していきたい。なぜならば、Lakoff and Johnson (1980)を始めとする認知言語学的なメタファー論が主張するように、人間の概念体系の大部分がメタファーによって成り立っているのならば、様々な概念領域に関わるメタファーの研究を一つ一つ積み重ねていくことは、人間の概念体系の仕組みの解明に大いに寄与することになるからである。

参考文献

- 松浦光 (2013). 「気象現象とメタファーの一考察—精神における「晴れる」を中心に—」『言葉と文化』 14: 113-127.
- 松浦光 (2014). 「「晴れる」と「曇る」のメタファー的意味の実現」『日本認知言語学会論文集』 14: 312-322.
- 松浦光 (2017). 「現代日本語における気象現象の概念化 —概念メタファー理論によるアプローチー」名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻博士学位論文.
- 糸山洋介 (2006). 『日本語は人間をどう見ているか』 東京：研究社.
- 中村明 (2014). 『分類 たとえことば表現辞典』 東京：東京堂出版.
- 佐藤信夫 (1992). 『レトリック感覚』 東京：講談社.
- 高尾亨幸 (2003). 「メタファー表現の意味と概念化」 松本曜(編) 『シリーズ認知言語学入門 〈第3巻〉 認知意味論』 東京：大修館書店, pp.187-249.
- Deignan, Alice (1995). *Collins Cobuild English guides 7: Metaphor*. London: HarperCollins Publishers.
- Grady, Joseph. (1997). Foundations of meaning: Primary metaphors and primary scenes. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.
- Lakoff, George (1993). The contemporary theory of metaphor. In Andrew Ortony (Ed.), *Metaphor and thought* (2nd ed.) (pp.202-251). Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, George, Jane Espenson and Alan Schwartz (Eds.) (1991) Master metaphor list (2nd ed.) (second draft copy). <http://araw.mede.uic.edu/~alansz/metaphor/METAPHORLIST.pdf>
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980). *Metaphors we live by*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1999). *The philosophy in the flesh: The embodied mind and its challenge to western thought*. New York: Basic Books.
- Shinohara, Kazuko and Yoshihiro Matsunaka (2003). An analysis of Japanese emotion metaphors. 『ことばと人間』 4:1-18.
- Shinohara, Kazuko and Yoshihiro Matsunaka (2009). Pictorial metaphors of emotion in Japanese comics. In Charles J. Forceville and Eduardo Urios-Aparisi (Eds.), *Multimodal metaphor* (pp. 265-293). Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- 使用辞書**
- 新村出(編) 『広辞苑 第六版』 東京：岩波書店.
- 小学館ランダムハウス英和大辞典第二版編集委員会(編) 『小学館ランダムハウス英和大辞典 第二版』 東京：小学館.
- Longman Dictionary of Contemporary English* (5th ed.). Essex: Pearson Education Limited. (本稿ではLDOCEと略記)
- Oxford Advanced Learner's Dictionary* (8th ed.) Oxford: Oxford University Press. (本稿ではOALDと略記)
- Oxford English Dictionary* (2nd ed.). Oxford: Oxford University Press. (本稿ではOEDと略記)